

# 大学における中国語教育の現状と課題

大学の中国語教育は、コロナ禍により従来型の教育では対応が難しく、新たな対応を求められている。コロナという外的要因によって、半強制的にパラダイムシフトを迫られたわけだが、この間に中国語教育の今後を考えるうえで重要な取り組みも増えている。これを機に、転換期を迎えた中国語教育の現状と、改革に必要な課題について考えてみたい。

古川 裕

大阪大学人文  
学研究所教授

×丸尾 誠

名古屋大学人文  
学研究科教授

×清原文代

大阪公立大学国際  
基幹教育機構教授

×

中川裕三

天理大学国  
際学部教授

×阿部慎太郎

近畿大学法  
学部講師

×小川典子

愛知大学現代  
国学部准教授

× 司会 安部 悟

愛知大学現代  
中国学部教授

司会（安部）ではこれから『中国21』の座談会を始めたいと思います。今回の特集の責任者で司会を担当します安部です。どうぞよろしくお願いいたします。今回の特集のテーマは、「中国語教育の危機、そして展開」ということですが、先に特集の趣旨を簡単に説明させていただきます。

新型コロナウイルスが日本の社会に与えた影響は極めて大きく、本学の教育環境もここ数年はまさにコロナに振り回さ

れてきたと言っていると思います。これまで当たり前のように行われていた対面形式での教育が困難となり、オンラインのライブやオンデマンド、さらにはそれらを組み合わせたハイブリッド形式など、様々な形式の授業を個人レベルあるいは大学レベルで求められています。それにくさま対応できた個人や大学は別として、多くの場合従来とは異なる授業展開を求められ、それぞれが手探り状態の中で対応してきたというのが私の実感

です。そのような状況の中で、教員や大学の成功事例や新たな取り組みはこれまでも学会などで紹介され、その有効性について検討されてきましたが、アフターコロナになるのか、ウィズコロナになるのか見通せないような現状では、一時的、緊急避難的な対応ではなく、ICTの活用などを含めた新たな中国語教育のあり方への活発な議論が求められています。今回の特集では、論説で大学の中国語教育

の現場での様々な取り組みを、将来を見据えたかたちで改めて紹介すること、座談会では転換期を迎えている中国語教育の現状と課題について、それぞれの立場からお話しいただきたいと思ひます。

例えば学生の語学学習に対するモチベーションから言うと、近年はコロナの影響で旅行や留学などでの海外渡航に多くの制約が生じており、また国際情勢も厳しい状況が続いています。またAIなどを活用して翻訳技術が格段に進歩する

## 専門としての中国語教育

司会 では、ICT教育に詳しい清原先生からお話しただけるとありがたいです。

清原 中国語教育というテーマでお話ということですが、ちょっと切り分けをしないといけないと思ひます。中国語教育と一口にいつても、誰に対して、何を目的としてやるのかということと全然違てきます。本日のメンバーは全員大学教授ですので、今回のテーマとしては大学

など、コミュニケーション手段としての語学学習への意欲も低下傾向にあるように見えます。このような状況への対応も考えておく必要があるでしょうし、授業でのICT活用がごく普通に行われるようになったときに、我々教員は何をどのように教えればいいのか、もつと言え我々が教えることの意味をしつかり考えておくべきではないかと最近感じています。そのところを今日はお話しできればと思ひます。

における中国語教育ということだろうと思ひます。大学における中国語教育もやはり二つに分けるべきで、中国語学科や中国語専攻における四年間を通じて中国語人材を養成する中国語教育と、週一回か週二回やって一年間で終わってしまう第二外国語の中国語教育では、また全然環境が違てきます。ですので、今後話をしていく時に、どちらの話なのかということを整理しながらやらなといけな

いのではないでしようか。

司会 はい。私も同感です。実は古川先生が昨日他大学で講演をされたのを、オンラインで聞くことができました。清原先生がおっしゃるように、専門としての中国語教育と第二外国語としての中国語教育という分け方をすれば、古川先生の昨日のお話は専門教育のお立場からだったと思ひますが、内容を少しお話しただければと思ひます。

古川 はい。実は昨日(二〇二二年七月三〇日)金沢へ呼んでいただいて、北陸大学主催の中国語教授法研修会という公開講座で、「日本人学習者のための中国語教育(文法)を考える」というテーマで五〇分の講演をさせていただきました。先生方もオンラインで聞いてくださったというので、ありがとうございます。

この講演では、僕が最近とみに感じている日本の中国語教育の現状と将来に関する閉塞感と危機感をお伝えしたいというスタンスでお話をしました。

日本の中国語教育の現状や未来像を考えると、中国の動き、あるいは世界各

地での中国語教育も視野に入れて比較対照する必要があると思っています。つまり、彼の地でなされている「対外汉语教学」「国际中文教育」や「華語文教育」と我々が日々行っている「在日中国語教育」は似て非なるものであることをまず認識しておく必要がある。

彼我の違いがどこにあるかというところ、中国や台湾では目的言語の環境、すなわち中国語の環境下で、中国語を母語とする教師が様々な母語を有する世界各地からの留学生に現地でも出版された教材を使って第二言語としての中国語を教えている。学習者は教室を出てからも中国語の環境下にあつて、学習上も生活上も中国語でコミュニケーションをとる必要性がある。

翻って私たちの場合はどうかというと、今日の座談会のメンバー全員がまさにそうですが、日本では伝統的に中国語教師の多くは日本語母語話者ですよね。日本人教師が日本語の環境下で外国語としての中国語を日本人に教えてきた。学習者の側も中国語に触れるのは教室の中

だけで、課外で中国語を使う可能性もなければ、その必要性もない。教材や辞書や参考書も日本で出版された日本語で書かれたものを使うことができる。

というわけで、両者に共通しているのは中国語を教え学んでいるという点だけで、ほかの条件はまったく違う。この違いを前提として意識したうえでないと、日本の中国語教育の特徴や限界は論じられないと思っています。

昨日の講演でも、我々には彼の地の「三教問題」とは別の「三教問題」があ



古川 裕 [Furukawa Yutaka] .....

るということを強調しました。この二つは文字にすると同じなんですけれど、発音が違います。中国の対外外国人中国語教育でよく言われる「三教問題」とは「教師、教材、教学法」の三つですね。すべて名詞なので「教」の発音は第四声の「ㄉㄠˋ」です。この「三教」が大切であることは言うまでもありませんが、我々にとつてもっと大切なのは「教什么、怎么教、为什么教」という「三教问题」ではないでしょうか。こちらの「教」はどれも動詞なので発音は第一声の「ㄉㄠ」です。

まず「教什么」「何を教える」とは教える内容、日本人学習者に中国語の何を教えるのか。そもそも日本の中国語教育の現場には公認のガイドラインや学習要綱がありません。また、中国語を教えるほかに、いわゆる中国文化を教える必要があるのかも考える必要がある。次に、「怎么教」「どのように教える」とは教え方の問題。例えば、対面かオンラインか、紙の教材で教えるのかICTを活用した電子教材を使うのかなどなど、



近年の外国語教育を取り囲む外界状況は常に変動しており、「怎么教」に関して我々に選択と決断を迫っています。

そして、最後の「为什么教」「なぜ教える」は、世界各地の教育現場で教壇に立つ中国語教師が考えるべき共通の重要問題だと思います。日本人である私たちが日本人学習者に「なぜ」「何のために」中国語を教えるのか。「教育」とは「教书育人」の謂いですから、私たちは中国語を「教书」することによって、「育人」の目標としてどのような人材を育てたいのか。少なくとも僕は、学生たちが中国人になってほしくて中国語を教えているわけではない。僕は将来彼らが自ら身につけた中国語を武器として使いこなし、日本・日本人の立場から発信し議論できる、そんな人材に育ってほしいと願って中国語を教えました。これが外国語学部で中国語を専攻する学生への要求です。

中国語を母語とする人や中国から派遣されてきた先生方が教える場合には、同じ「在日中国語教育」に従事していても、

志が違うかもしれません。また、選択科目の第二外国語として中国語を学んでいる学生に同じことを求めるのは、現場の状況が見えていない発言に聞こえるかもしれません。それを承知のうえで、今日の座談会に、僕は専攻科目の中国語を教えている日本人教師という立場から発言させていただくつもりで出てきました。

安部先生、中川先生は同じ立場ですね。丸尾先生と阿部先生は……

司会 第二外国語としてですね。

古川 ですね。という意味でここにも国境がある。

司会 古川先生と中川先生と私が専門中国語で、こちら側に三人並んで座っています。向かい側に丸尾先生と阿部先生が座っていらっしゃって、オンライン参加の清原先生を含めると、そこで分かれると思います。

古川 というわけで、今日の座席配置にも隠された意味がある？

司会 清原先生がおっしゃるように分けて考える必要があると私も思っていたのですが、まずは専門としての中国語教育

について考えてみたいと思います。

第二外国語については時間数の問題などの制約があることは確かですし、先生方も苦労されていると思いますので、話も自然にそちらに移っていくと思います。また第二外国語について大きな変革を考へておられる大学もあるようですが、後ほどそういうことも紹介していただきたいと思っています。そういうことでよろしいですか。

清原 はい。よろしくお願いします。

司会 まずは専門として中国語を教える場合に、時間やシステムや教材、いろいろなものを使えるという前提で、我々は何をすればいいのか。ICTの活用は文科省がかなり前から言っていて、それはまず小中高からスタートしたのですが、当然これは大学にも及んでくるわけです。我々の時代は、大学に入ってからやつとパソコンに触れたので想像がつきにくいのですが、今は大学に入ってくればほとんどが自在にパソコンを使いこなすという状況になっているわけですね。パソコンそのものがもう古いかもしれな

い。今やスマートフォン時代ですね。スマートフォンさえあれば何でもできるという時代になってしまっている。

愛知大学では昔、「パソコン中国語」という授業を作ったのでパソコン操作を一から教えていたんです。ピンインを入力して中国語に変換できたと喜ぶところからやっていたのですが、この授業が成り立たないというか、やる必要がなくなってしまうました。学生は自在にスマートフォンを操作して、ピンインの入力と変換の仕方さえわかれば、簡単に中国語入力ができると思います。状況がかなり変わってきていると思うのですが、清原先生、今後どうなっていくのでしょうか。

清原 スマートフォンを使うのが得意というのは事実ですが、パソコンのスキルに関しては決して上がっていないと思います。スマートフォンは使えるけれども、パソコンはきちんと使えないという学生が出現しています。

司会 確かにパソコンは使えないという学生もいますね。

清原 パソコンだとフォルダとファイルという概念がありますが、そういう階層性はスマホにはありません。だからファイルをどこに置いたかわからなくなりましたとか、以前ならなかったような質問がきたりもするのでパソコンのスキルが上がったわけではないです。スマートフォンを自在に使えるようになったということだと思います。

古川 若者が常に触れているスマートフォンやSNSのアプリの影響でしょうね。

清原 ええ。

司会 中国語教育の中でどういうかたちでICTを活用していくのか。実は我々にはまだよく見えてない。

清原 愛知大学ではコロナの時期にオンライン授業をどうされていましたか。

司会 それを聞かれるのが一番困るんですが(笑)。大学としてはライブを使ったり、Moodleを使ってオンデマンドでやるということを一応決めたんですが、一年目は大混乱していましたよ。ビデオの撮影場所も教室や研究室を使ったりす



るものだから、電車の音がうるさくて撮りなおしたり、パワーポイントの作成にも時間がかかったり。もちろん個人差はありますがね。二年目ぐらいにやっと先生方もオンデマンド授業のやり方に慣れて、それなりの対応ができるようになりました。今はMoodleを使った授業にもだいぶ慣れてきました。

語学で言いますと、愛知大学では最初の頃は対面授業ができませんでしたので、オンラインライブでやっていたら対面に反して、やれなくなったらまたライブでというかたちを繰り返すのですが、そのときにオンラインライブに切り替えたから困るということがなかったところこそが、実は本学の問題点です。つまり、旧来型の授業を行っていたために、オンライン授業になってもあまり大きな支障がなかったのです。ただ本学の場合、先ほどの古川先生のお話にもありませんが、基本的に我々は日本人学生に中国語を教えているわけですが、学生の中に韓国人留学生がいて、実はコロナの時

はこれらの学生が日本に入って来られない。講義の科目はオンデマンド形式でできる。しかし彼らも中国語を学ぶ必要があるので、ハイブリッド型で教室に自分のパソコンを持ち込んで授業をし、宿題などはMoodleを使って提出させるといったことは何とかできるようなりました。

授業設計の見直しといった新たな対応はあまりできていないのが実情です。人数が多い講義科目は基本的には今でもオンデマンドです。人数の少ない演習科目ですとか語学科目は対面でやっています。それくらいしかできていません。それが現状ですね。

清原 それで十分ではないでしょうか。今までなかった選択肢を私たちは手に入れたのです。以前だったら留学生が来日できないから対面とオンラインのハイブリッド授業にしようとか、大講義をオンデマンド型授業にしようなんておそろしく誰も考えなかったでしょうし、実際に実行するとなると非常に難しかったでしょう。今はもう、どの大学でもいろいろ

トラブルはありながらも、だいたいできるようになったというのは非常に大きな進歩で、たぶんこのコロナ禍で十年分ぐらいこの動きが前に進んだのではないかと私は思っています。

私や北海道大学の田邊鉄先生は中国語教育におけるICT活用の世代としては一世代前になります。今のトップランナーは中国語教育学会の会長をなさっている目白大学の氷野善寛先生です。氷野先生はご自身でいろんなシステムを作って公開されています。例えば音声入力で発音を練習するOndoku Chineseや、簡体字で書いた文章を入れると単語ごとに分かち書きして拼音をふつてくれるChinese Text Analyzerなどを無料で公開されています。いろんなICTの技術が使えるのでそれを適宜上手に取り入れていきながらやっていけばいいわけです。例えば氷野先生のサイトにリンクを張って、このサイトに行ってくださいということをしてくださいと学生に指示します。そして、指示通りに行ったという証拠を私たちが何らかのかたちで集めればいいわけ

です。

愛知大学でなさっていることも特に遅れているというわけではありません。このコロナ禍をきっかけに十年ぐらい先に進んだと思います。もう元には戻れないです。何かあったときに必ずオンライン授業は選択肢に入つてきます。コロナ禍のときには対面授業ができないからしかたなくやっているという改善の策でしたが、今後はおそらく改善の策ではなくて、これはオンラインの方がいいだろうというような選択肢になってくるでしょう。例えば教養科目で二〇〇人ぐらい教室に集めて講義をするよりは、オンデマンドの方が良くないですかということ

## 第二 外国語としての中国語教育の現状と課題

丸尾 名古屋大学では、第二外国語として中国語を教えています。コロナ禍での授業形態についてはオンデマンド、オンライン、対面式の中から教員が選ばれます。事務方から事前にアンケートが来て打診されます。これは各教員の意志を尊

です。

中川 愛知大学で日本に入国できなかった韓国人の留学生にハイブリッドで対応されたということですが、それはすばらしいことだと思います。私自身がコロナになったときは、教員の私のほうが大学に行けなくなつてしまいました。隔離施設に入りましたが、パソコンを持ち込んで、そこからZoomで中国語の授業をしました。コロナに苦しめられましたが、コロナでZoomという手段を手に入れたために、教員が大学に行かなくても授業ができました。そういう意味で私も、コロナで教育の場に大きな進歩があったのだつたと思つています。

重しており一見良さそうですが、教員間で特に打ち合わせもしないまま各自選んでいるため、クラスにより進み具合や習熟度に差が生じる結果となっております。昨日、私も古川先生の中国語教授法に関するご講演をオンラインで拝見し、大変

勉強になりました。何をどう教えるかといった問題など、本来は部局の中国語教員皆で共有すべき問題なのですが、現状では個人で対応するレベルにとどまっています。

さらに加えて、英語以外の外国語の存在意義が問われています。本務校では、この四月より英語以外のいわゆる初修外国語の必修コマ数が昨年度と比べて減りました。現在は正直なところ、何をどう教えるかといった課題よりも、もっと深刻な問題に直面しているんです。

司会 実は大きな問題がそこに隠されていると思います。だから、第二外国語という存在そのものもだんだん軽視されつつある。本当に専門中国語だけがいいのかということですよ。そういう不安があります。

丸尾 大学としては国際化ということの方針として掲げています。しかしながら、結局は英語ができればいいと言っているように聞こえます。多様性といった側面にも、もっと目を向けてほしいものです。

司会 話は少しずれませんが、学生も多様化しており、愛知大学現代中国学部には中国語母語話者やそれに近い学生が一般学生として入ってきます。特別なクラスを作って対応していますが、十分に対応できていません。愛知県というのは在留型の中国人が多く、その関係で毎年そのような学生が一定数います。いわゆる継承語教育を今後どうしていくのかというのも、先ほどの専門としての中国語教育の一つの課題になると思います。

ただ、今は話が第二外国語としての中国語教育になっていきますので、このまま続けましょう。

丸尾 名古屋大学だと第二外国語の中では、中国語選択者が一番多いです。極論のようですが、やる気のある学生に教えたいので、必修から外して選択制にしたい。できればいいじゃないかという声も無きにしも非ずなんです。そうすると語科の間での見解の相違もありまして、中国語は学生が多いからそういうことが言えるんだということになってしまうんですね。ですから、やはり英語以外の外国語



..... 丸尾 誠 [Maruo Makoto]

担当者で意志を統一して取り組んでいくということになります。

司会 阿部先生、いかがでしょうか。

阿部 コロナ禍で、中国語圏へ旅行にも行けない、観光客も日本に來ない状況で、特に第二外国語学習者は、何を目標に中国語を学ぶのがわからず、学習のモチベーションが保てない学生がコロナ前に比べて多くなっている気がします。また、教員も、これまでのように「この表現は、旅行の時やアルバイト先で使えるから覚えよう！」ということが言えな

くなりました。

少し話はそれますが、先ほどの古川先生の「三教問題」「何を教えるか」「どのように教えるか」「なぜ教えるか」の話を聞いて思いました。「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「なぜ学ぶか」がわからない第二外国語学習者は、まずそこから考えなければなりません。また、教員もその点を注意しないとイケないなと。

こうしたなかで、先ほど話題に上がった今後のICT、メディア教材に関してですが、第二外国語学習者には、学習のモチベーションの一つであった旅行や、訪日観光客への接客、道案内といった場面を体験できるようなもの、コロナ禍でできなくなったことをコンテンツとして取り入れていく必要があると考えます。これは、教科書も同様で少し変えていかないとイケないかなと思っています。

清原 今、阿部先生がおっしゃった古川先生の「三教問題」は、実は「三学問題」と表裏だということは非常に重要な指摘だと思えます。特に第二外国語の場合は「为什么学?」（なぜ学ぶのか）、「为什么



教? (なぜ教えるのか) という問題のウエイトが非常に大きくなってきます。

今ここにいるのは全員、日本語が第一言語で、中国語を教えている教員です。

私は、こういう教員は実は絶滅危惧種です。よく言っています。なぜかと言うと、先生方は大学に入ってから中国語を始めてこの道に進まれたと思います。現在大学院に在籍している院生を見ると日本語が第一言語の人はごく少なくなっています。もちろん中国語学科で教える日本語を母語とする教員は今後もおそらく確保できます。問題は大量の非常勤講師が必要な第二外国語での体制はどうなのかと言うと、おそらく日本語を第一言語とする先生に文法を教えるもたつて、中国語を第一言語とする先生に会話を教えるもたつてというモデルはもう成り立ちえないと思います。そうなったときに中国語を母語とする先生方にどう教えていただくかという問題が出てきます。母語話者だから教えられるという、安易な理解が世間にはあります。世間だけではなく実は大学の中にもあるの

ではないでしょうか。母語話者を連れてきたら外国語が教えられるという誤解が大学人の中にもあると私は感じています。古川 清原先生のお話を受けて言えば「三教」では足りなくて、日本の場合には「誰教」「誰が教える」を含めた「四教問題」に注意が要りますね。

清原 日本の現場にはその問題があります。中国語学科であれば、いきなり直接法で、中国語で中国語を教えるのも大丈夫でしょうが、第二外国語ではおそらくそれは無理でしょう。三〇〇四〇名、場合によっては六〇名ぐらいを一クラスにして、週一回あるいは週二回の授業で直接法ではおそらく教えられません。日本語を使って教えていただかなければならぬということが生じてきます。

そうなったときに阿部先生がおっしゃったような教科書の問題があります。先生方もご存知の通り、毎年多くの新しい教科書が出版されます。ただ一つ共通点があり、今の大学の中国語の教科書の多くは、教員の解説なしに成り立ちえないのです。ある教科書会社のウェブ

サイトにいったら、わざわざ注記が書いてあったのを見たことがあります。これは大学で使う教科書であつて、自習ができる教科書ではありませんというような趣旨の注記が書いてありました。それはおそらく何も知らない一般の方が書名を見て、これを買えば中国語が自習できるんだと思つて、出版社に注文を入れてしまふのだと思うんですね。しかし実際には教員の解説があつて教員が練習をさせて、それでやつと成り立つという教科書ですよ。果たしてその教科書のままでいいのかという問題です。つまり、解説も含めて、教室内での活動、すなわち、こういう練習をさせてこういうかたちで評価するところまで踏み込んだ教科書が必要になってくるのではないかと前から思つてるのですが、実はなかなか難しい。まず誰が作るのかという問題です。そして採算がとれるのかという問題です。ボリュームがどうしても大きくなりますから値段も高くなります。そうすると学生にとっては買いたくない教科書になってきますよね。大体二〇〇〇円か

ら二五〇〇円くらいが学生が何とか出せる

値段だと思えます。

## 教科書の課題

司会 教科書の問題は昔からあって、これまで中国語の教科書というの一人の先生に一冊みたいな感じで作られていたわけです。もちろん大学として共通の教材を使うこともありますが、大学によって授業回数や条件が異なっているため、他大学の先生が使おうとしたら使えない。でも、中国の場合は違うと思えます。例えば有名な北京語言大学出版社みたいなところが、専門家を集めていくつものバリエーションを持った教材開発をして、それを各大学が使うといったかたちですね。日本はずっとそういう体制にはなっていない。うちの学部の教科書もオリジナル教材を使っていますが、市販していません。市販しても他大学や個人では使えないと思うからです。誰でも使える教科書がこれから作られるかと言うと、今言ったように事情がそれぞれ違うので、なかなか現実的には難しいのかな

と思います。やはり自前で教科書を作るしかないのですが、なかなか新たな試みができない。

ただ逆に言うと、今は教科書に頼らなくても、補助教材がたくさんあるので、それらが活用できるのではないですか。

例えば、YouTubeを見ればわかりやすく、解説をしたものがたくさんありますし、逆に言うとそういうものを見たほうが、第二外国語の学生さんなどは楽しいかもしれない。

そういう補助教材はもう先生方も使っていらつしやいますよね。小川先生も何か使っていますねでしたか。

小川 そうですね。関西大学中国語教材研究会が作った、オンラインで使える、音声つきの中国語音節表は、よくクラスでも利用していますね。

司会 中川先生も使っていますしやいますか。

中川 大阪大学で作られた動画の発音の教材を使っています。清原先生ご紹介くださいました。今、マスクをしているので、非常に重宝させていただいています。授業外でも、学生に自宅でマスクを外してその動画をお手本に自分が発音しているときの口の形が見えるように録画して提出させるようにしています。

古川 ご愛顧いただき、ありがとうございます。大阪大学の世界言語研究センターが開設している「社会人を対象とした学士レベルの外国語教育プログラムの提供」事業のコンテンツサイト (<http://elminohosaka-u.ac.jp/dlit/>) です。

清原 文法説明の部分を全部私が録音録画するというのは非常に大変ですので、私は東京外国語大学の言語モジュール (<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mv/zh/>) の文法モジュールを使わせていただいています。一個ずつ項目に分かれていますので、自分の使っている教科書に合わせて、言語モジュールのここに解説があるかと Moodle からリンクを張ります。私も

もちろん授業で説明しますが、欠席したら私が授業で解説していることと同じことが書いてありますから、言語モジュールの解説をまず見てくださいと学生に指示します。

中川先生がおっしゃっていたのは郭修静先生が監修されている教材ですね。中国語母語話者の口元が見られる発音学習のためのビデオ教材です。この教材は本来に良い時期に作り直していただきたいました。以前はFlashという技術を使っていたので、スマートフォンでは見られなかったのです。それを今年（二〇二二年）になってからスマートフォンでも見られるかたちにして公開してくれました。今はマスクを外せませんから、授業中に、mの口の形はこれですと言って見せたり、nの口の形はこれですと言って見せたりします。もちろんMoodleからリンクも張ります。

このようにICTのおかげで、さまざまなリソースをうまく集めながら授業を実施することは可能になっています。ですから教科書に全部載せなくても、公開

されている教材に対してリンクを張っていくというかたちで補える部分は多くあります。ただし、学生がよく見るYouTube、TikTok、Instagramなど、いろいろなところに中国語の教材があります。玉石混濁です。インターネット上にあるものはすべて正しいと思ひ込む学生もいますから、私たち教員から見てもこの説明はちょっとまずいのではないかと、逆にこれなら安心して見せることができるのか、そういう目利きの役割が今後必要になってくるのではないでしょ



清原文代[Kiyohara Fumiyo] .....

うか。

**司会** 昔は本当に教科書に頼らざるを得なかったのですが、補助教材のなものを利用しながらだったら、ある程度の教科書があればそれで充分ということになりますね。

**清原** 今紹介したのは基本的にインプット、知識を入れる方です。アウトプットをどう確保するかという問題があります。例えば教科書の練習問題の中には「これを訳しなさい」という設問がありますが、こういう練習問題はたぶんもうそのままでは使えません。

**司会** そういう制約が逆に教科書にはありますね。

**清原** 訳しなさいという練習問題はもう使えないと思った方がいいと思います。中国語を日本語に訳しなさい、日本語を中国語に訳しなさいと言うと、学生は機械翻訳にかけます。今のスマートフォンの機械翻訳アプリは文字認識ができるので、教科書カメラで写して機械翻訳にかけて終わりということができてしまいます。ですので、アウトプットをどう確

保するか、それを意味のある活動にできるかということが重要です。そういう練習の設計は実はかなり難しいです。

昨日、古川先生の後に講演された神戸外語大学の植村麻紀子先生が Project Based Learning（課題解決型学習、以下 PBL）の実践例を紹介されていました。植村先生の実践は、アウトプットをいかに意義のあるものにするかということだと私は思いました。ただ、いきなり PBLをやってくださいと言っても無理なわけで、そうなると教員でチームを組んで取り組むか、あるいは教科書の中に PBL的なものを入れ込んで、こういう活動はどうですかと提案する必要があります。教科書の役割がちよっと変わってくるのではないかと思います。

**司会** 例えばそういうアウトプットを確保した教科書の開発を、個人でやるのは相当難しいですし、無理があると思います。しかし、すべての教員と相談しながら新しい教科書開発ができるわけでもありません。うちもたくさんの非常勤の先生に来ていただいております、そういう人た



安部 悟[Abe Satoru] .....

ちにどのように関わってもらうか。そんなことを考えると、なかなか次に進めないというのが現状です。非常勤の先生の方が ICT を積極的に活用されていたりします。

**清原** 私もたくさんの非常勤講師をお世話する立場にあるので、安部先生のご苦勞はすごくよくわかります。私の勤務先では、非常勤の先生方は時給で働いています。担当授業時間以外で、例えば教材開発に協力してもらったときにも、その分に支払う時給はありません。それ

を無報酬で協力してくださいというのは非常勤だけで生計を立てている先生方に対してはいけないことです。そうすると最後の頼みは教科書に書いておくということしかないのではないかと思います。

〳〵为什么教（なぜ教えるのか）の部分ですが、これには三つの方向性があると思います。一つの方向は新しい外国語を学ぶという体験を通じて、言語の学び方を学ぶという方向性に行くということです。これは実は中国語である必要はなく、何語でもいいわけです。英語以外の何かであればいい。この方向では、大阪大学のドイツ語の岩居弘樹先生がやっていらっしやる実践が非常に興味深いです。ティーチングアシスタントを入れて、一学期に未習の言語を三つ教えておられます。一五回の授業ですから一言語あたり五回ずつです。一つの教室にいる学生を三つのグループに分けて、三言語が同時に教室の中で聞こえる状態で学んでいきます。基本的には音声だけで教えていらっしやいます。文字は導入してい

ません。大阪大学の学生だからできるの  
だろうとよく言われるようですが、最近  
は小学生にまで実践を広げておられま  
す。もう一つの行き方は逆に中国語でな  
ければならないという方向にいくかたち  
です。言語を通して文化に接するという  
方向に舵を切ることです。それからもう  
一つの方向性は植村先生が実践してい  
らっしゃるPBLのほうに舵を切ること  
です。ただ、私自身はその三ついずれに  
もなかなか踏み出せずにいます。

**司会** 丸尾先生、いかがですか。

**丸尾** はい。清原先生が先ほどおっ  
しゃったのは、教科書に文法事項の説明  
を書いておくというお話ですか。

**清原** いいえ、説明の部分はさっき言っ  
た通り東京外大の言語モジュールリン  
クを張るという方法もあります。教案の  
方です。この練習をしてこういう能力を  
身につけて、こう評価してくださいの部  
分ですね。

**丸尾** わかりました。教科書についてで  
すが、出版社の人と話していると、教授  
用資料のほうを詳しく書いてほしいとい

う要望が結構あります。何でそうしたも  
のが必要なんだろうと思ってしまうので  
すが、我々は文法を専門としているから  
わかっているものであって、専門でない方  
もいらつしやいますよね。

**清原** はい、おっしゃる通りです。特に  
第二外国語で教えている方で、中国語の  
言語学専門の人は極めて少ないと思いま  
す。専門は文学だったり哲学だったり、  
歴史だったりという方が多数派でしょ  
う。中国語母語話者の先生方について  
も、「これは言える」「これは言えない」  
という判断はできても、学生に「なぜで  
すか」と聞かれたときに立ち往生してし  
まうことがあるだろうと思います。

**丸尾** 教科書の選択が難しいのはわかり  
ますが、結局どれを使っても絶対文句は  
出ますよね。

**清原** はい。絶対に文句は出ます。

**丸尾** 教員が不満を言っていると、学生  
がその教科書に対して不信感を抱くよう  
になるので、学生の前では言わないよう  
にしています。私自身はそんなに教科書  
べつたりということはありません。です

から、最初に出てくる発音の部分なんか  
は実質、教科書はあまり使っておらず、  
必要な学習事項は別途、自分でプリン  
トを作成して、配布しています。

**清原** はい、専任の場合はそれで良いで  
す。ただ、私は専任になる前に非常勤講  
師の時代が長かったのですが、非常勤の  
場合は教科書を指定されるとその通りに  
教えなければならぬというプレッ  
シャーを強く感じます。実際毎日違う大  
学に行って何コマも教える状態になる  
と、もう教科書から外れて何か新しいも  
のを用意する余裕がなくなっていくます。

**丸尾** 極端に言えば、自分なりの方法で  
いいわけですね。

**清原** もちろんそれはそうです。私が  
言っている教科書に教案まで書くのはあ  
くまで次善の策です。しかし、そうしな  
いとおおぜいの非常勤講師に来ていただ  
いて、ある一定のレベルを保つことがで  
きないのではないかとずっと悩んでいま  
す。小川先生の非常勤時代はいかがでし  
たか。

**小川** 私は実はちょっと経歴が変わって



いまして、英語教員を長くやっていたんです。今、教科書の話が出ていましたが、英語の教科書と中国語の教科書を比

## 中国語と英語の教科書の違い

清原 英語の教科書の作り方を教えてください。

小川 先ほど清原先生がおっしゃったように、説明の部分はそれほど無く、英語の教科書の場合ですと、教科書の中には様々なタスクが散りばめられているものが多かったです。つまり、教科書の中で TBLT (Task-Based Language Teaching) が設計されているんですね。

古川 どのレベルで？ 中学、高校？

小川 大学でもそうでしたね。

古川 学習歴が長い学生ですか。

小川 英語です。で学習歴はそれなりに長いですが、英語のレベル的には中学・高校生ぐらいの内容でした。そこでは文法項目の説明をするというよりも、説明は教科書の前半で簡単にする程度で、あとは教師がいろんな練習を学生に

べたときに、作り方が全く違うということを感じていました。

させるようになってくるんです。教科書の中で、学習者に向けたタスクが設計されているんですね。私が英語の非常勤講師をやっていたときには、そういったタスク型の教授法、TBLTのトレーニングなどを大学で教員を集めてやっていま



..... 小川典子 [Ogawa Noriko]

した。非常勤講師であっても一緒にトレーニングを受けて、大学で統一したカリキュラムがありましたので、先ほどの「怎么教」(どのように教えるか)の部分、教え方の部分も大学でやっていましたね。そこは英語と中国語でだいぶ違うなど、私は両方経験した人間ですので感じていました。

清原 そうですね。多くの中国語の教科書は基本的にタスクの部分がほとんどなのです。穴埋め問題などインプットしたものをそのままアウトプットする部分はあるのですが、タスクがないのです。そのタスクの設計まで含めて書かないといけないのではないかと思います。また、文法の説明は丸尾先生のおっしゃる通り文法がきちんと説明できる教員ばかりではないのは事実です。ただ、それを教科書に書くか、ネット教材、例えば東京外大の言語モジュールなどを使うか、あるいは教科書の教授用資料に書くかということはありますが、とにかく教科書に沿って授業を設計していけばタスクを含む授業が一つでできるみたいな教科書



が、これから必要ではないかと考えています。

小川 私が以前使用していた英語の教材ですと、教員用のテキストが別にあつて、学生が使うための教科書と、教師が見るための教科書の二つありました。そして教員用教材を見ると、「この課では、こういうふうに通じてください」という、教え方のポイントが書かれているんですね。教員には、教科書が二冊セットで与えられていました。

清原 でないとちよつと教えられないのだと思います。そういうものがないと、もう単純に「听写」(ディクテーション)しなさいというようなかたちになつてしまふのではないのでしょうか。

古川 新しく出るテキストでも教授用資料が付いていることを売りにしたものがありませんね。

清原 そうですね。

古川 そこには、英語の教材みたいにタスクが書いてあるのかな、それとも、日本語訳とかドリルの答えが書いてあるのかな。

小川 先ほどお話しした英語の教材ですと、「こんなタスクが考えられますよ」という例がいくつも書いてありましたね。

古川 それを初修の外国語授業でどうやって盛り込むんだろう？

清原 初修の場合、ゼロから始めるのでタスクの設計が確かに難しいですが。

古川 英語や他の外国語のやりかたも学ぶ必要があるんでしょうね。

清原 そう思います。私が一年生の前期のクラスでやっている例で申し訳ないですが、私の勤務校はコンピューター抽選で学部が違うお互い知らない者同士が集まります。そこで全員立ち上がつてお互いの家の場所を尋ねあう会話をします。もし家が相手と同じ都道府県にあつたら同類を表す副詞「也」を使つてくださいます。「也」が使えた相手とは離れずにさらに自分たちの仲間を探して聞き回つてくださいます。そうするとクラスがいくつかのグループに分かれてきます。ある程度分かれてきたら最大グループのところに行き、「你们家在哪儿？」(あなたたちの家はどこにあります

すか)と尋ね、全員で声を揃えて答えてくださいます。そうすると学生たちはまずは「我家……」と言いかけてますが、複数いますよね？と私が言うと、「我们」を思い出して「我们家在大阪。」そこでもう一つ入れようと言つて包括を表す副詞「都」を入れた形で言つてもらいます。極めて簡単なタスクですが、教科書で出てきた副詞「也」と「都」を自分で体験することが出来ます。こういう小さなタスクを教授用資料でもいいし、教科書本文に書いておくと、「听写」(ディクテーション)と「背诵」(暗誦)だけではない教室での活動ができるのではないかと思います。こういう細かいテクニックは共有されていないだけで、先生方がそれぞれ持つていらつしやるはずですよ。

## 留学などの課題

司会 ありがとうございます。少し話を戻したいと思います。一つには教科書問題があります。もう一つは授業の中身です。例えば、文法をしっかり教えるとか、文化を教えるとか。もしくはPBLをやるとか、タスクを与えるとか、いろんな話があったと思います。それ以外で何か問題点はありますか。

古川 今日まだ話題に挙がっていない問題なのですが、オンライン授業になつてどれほどの教育効果が上がったのかというところが気になります。現状に対する閉塞感の出どころは、教員も学生も現地へ行けないということも一因ですよ。現地体験に裏打ちされない外国語学習は切ないです。日本の中でしか中国語を学ばないのなら、中国のことを知るよりも日本のことを発信するほうに方向転換しても良い。

だいたい最近のオンライン留学って、形容矛盾ではありませんか。バーチャル

な現地体験？ 皆さんの大学ではどうですか。

司会 先生のところでは、大学としてオンライン留学を認めているんですか。

古川 高学年になると留学希望者が多いです。休学扱いで。

司会 休学扱い？

古川 はい。とは言っても、オンライン留学なので学生は日本にいたままですから、こちらの授業にも出ていますけれど。

司会 愛知大学はまだオンライン留学を認めていないんです。現地に行かないと認めません。それにはいろいろ理由があつて、オンラインだと相手国の事情がよくわからなかつたりしますし、学生が適当に見つけてきたものを単位として認められるのかということがあつて、まだ一歩踏み出せてないのです。そういう点はいかがですか。

古川 中国語に限らず外国語専攻の学生たちは、やはり三年生以上になると海外

へ出たがりやすから、今しばらくはオンライン留学しか他に選択肢がないという状況ですね。

小川 今、非常勤先の大学で、留学から帰国した学生のために設置されたクラスを担当しています。それまでの実際に現地へ行つて帰ってきた学生たちのクラスと、今のオンライン留学に参加しただけの学生、両方教えましたが、クラスは全く別物ですね。言語能力的にももちろん違うのですが、それ以上に興味、関心の幅が全く違います。実際現地に行つて体験することや、肌で感じるこつとて、やはり大事なんだなと、学生を見て感じましたね。私のクラスでは台湾留学から帰ってきた学生を教えていて、台湾の教材を使っているのですが、学生の食いつきが全く違いました。例えば台湾の文化であつたり、考え方であつたり、言語のバックグラウンドにあるものの理解だったり、全然違いますね。オンライン留学はもちろん一つのツールではあるのですが、現地へ実際に行くのとオンライン留学、その差はかなり大きいということをは

実感しています。

中川 天理大学も中国、台湾の留学がで  
きなくなつたことで、大変大きな影響が  
ありました。授業で中国語を学ぶだけで  
実際に使う機会がない状況で、学生の中  
国語学習のモチベーションを保つのは至  
難の業です。幸いうちの協定校の中で、  
今春オンラインでの交換留学が可能に  
なつた大学がありまして、その大学のオ  
ンライン授業に出た学生に関しては、従  
来と同じように授業に出た時間数に基づ  
いてこちらの単位として認定しました  
が、それでいいのか悩みました。

先ほど小川先生がおっしゃつたよう  
に、留学というのは現地で中国語を勉強  
するだけではなくて、いろいろなことを  
体験するので、それも含めて初めて留学  
と言えると思います。日本でオンライン  
授業を受けただけの学生と、実際に現地  
で学んだ学生とでは、中国語力だけでな  
く、人間力にも大きな差ができるように  
感じますので、私としては現地に行かな  
いオンライン留学は推奨しません。むし  
ろ日本でしか学べないことをしっかりと学

んだほうがいいと思っています。幸いこ  
の秋から台湾留学が復活したので、今年  
の前半コロナで現地に行けなかつた学生  
がこの秋から後半だけでも行けるように  
なつて本当に良かったです。

丸尾 名古屋大学の中国語関係の科目に  
は、複数の教員が交代でそれぞれの専門  
に基づいて中国の言語や文化などに関す  
るテーマを扱うリレー講義があります。  
それを履修した学生が夏休みに上海に短  
期語学研修に行くというシステムができ  
ています。しかしながら、今年もコロナ  
の影響で中止となりました。これまでに  
参加した学生は、行って良かったという  
ことで、帰国後はさらに熱心に中国語学  
習に取り組むようになるんですね。ま  
た、一二月頃には学内の中国語スピーチ  
コンテストがあるんですが、上海に研修  
に行った学生も、これに出場して良い成  
績をおさめるといふ流れができていたん  
です。これもコロナの影響で中止になり  
ました。

司会 それに代わる何かは？  
丸尾 特にないんですね。

小川 代わるものとして、よく挙げられ  
るものには、タンデム学習 (Tandem  
Learning) や COIL (Collaborative  
Online International Learning) 等があり  
ますね。選択肢の一つにはなり得るかも  
しれません。

清原 これは先祖返りしたところがあり  
ます。この前の中国語教育学会の全国大  
会で東京外国語大学名誉教授の興水優先  
生が「中国語教育の「これまで」と「こ  
れから」(汉语教学 继往开来)」と題し  
て講演されていました。昔は国交がなく  
て中国に行けなかつた時代がありまし  
た。その時代だと、日本に住んでいる中  
国語母語話者は今よりもずっと少ない状  
態ですよ。そのなかで中国語教育を  
綿々と続けてこられたわけです。今また  
コロナのせいで、現地に行けないといふ  
点で昔に戻つてしまいました。ただ、当  
時と比べれば使える手段は増えたと考え  
たほうがいいのではないのでしょうか。オ  
ンラインでも会えるし、今は多くの中国  
語母語話者が日本に定住していますよ  
ね。もちろんオンラインとリアルに実際

に行く留学はもう比べることはできません。中国語が実際に使われている環境の中に身体全体を置くことと、画面の向こうにいるというのは全然違う体験だから同列には考えられないと思います。ですので、もちろん実際に留学に行けるのが一番良いのですが、行けないなら行けないなりに昔に比べれば使える手段が増えたという気はしています。

**司会** 愛知大学現代中国学部は「現地主義教育」というのを看板にしているので。清原 それは厳しいですね。

**司会** 現地プログラムという留学プログラムを毎年やっていますが、やり始めてからもう二〇年以上になります。この二年ぐらいは留学先である南開大学に行けないので、オンラインで授業をやってもらっています。それを国内現地プログラムと呼んだりしています。

この中国現地プログラムは、正規の授業として二年生全員で現地に留学するというもので、コロナ前は中国、台湾、マレーシアに派遣していました。実はもうだいぶ軌道に乗ってしまって、日本で最

初に一年間中国語をしっかりと勉強して、現地で半年間留学をし、その最後に全員にHSKを受けさせるんですが、最近やつと全体の七割ぐらいがHSK5級を取って帰ってくるようになったんですよ。これは我々にとっては大変喜ばしいことで、やつとここまでできたという実感がありました。

ただ、今回のコロナでオンラインになった途端に合格者がかなり減ったんですね。リスニングの点数がやはり取れない。先ほど古川先生もおっしゃったように現地でいろいろ体験をするということはとても大切で、学生にとっては現地の生活体験が大きな刺激になり、その後の勉強意欲も高めてくれるんですね。我々が現地主義教育を掲げたのは、学生をとりあえず現地に放り込んでしまえ、放り込んだら問題意識も生まれ、問題解決力も自然に身につくだろうと考えたからです。そういう留学ならではの良さというか、学生たちが成長して帰ってきてくれるのが実感できていたのですが、ここ二年間は国内現地プログラムになって

しまい残念です。先ほど中川先生がおっしゃったように、今年台湾には行けそうなので、秋に台湾とマレーシアに学生を派遣しようと思っていますが、ただ中国には行けないので、学生の三分の二は相変わらずオンライン留学です。

**清原** そうですね。東亜同文書院以来の伝統ですものね。

**司会** はい。その通りです。実際に現地に行くことがいかに大切だったかが、データを見ても一目でわかります。

**中川** 私自身の留学経験から言っても、留学は中国語を学ぶだけではありませんでした。中国留学はホームステイができませんので、世界各国から集まった留学生が同じ留学生寮で生活します。その人たちと一緒に生活したり授業を受けたりすることによって、日本人がいかに消極的か、日本にいるときはそれでよくても、彼らと仕事をするとなると負けてしまうということを実感できるんです。

昨年と今年の夏休みに、大阪産業大学の紅粉芳恵先生のご紹介で上海外国語大学のオンラインサマーキャンプに天理大

学の学生が参加させていただいたのですが、参加した学生が口々に、欧米の学生が積極的だったのでこれではいけないと思つたと言っていました。

オンラインであつてもそういう態度を学べた点については良かったのですが、やはり私たちは専門課程ですので、卒業後中国ビジネスができる学生を育てなくてはなりません。中国語が少しできるようになつただけでは、中国ビジネスはできません。留学することによっていろいろな人たちと接するわけで、私も留学中に中国各地に旅行して、旅先で知り合った人に良くしてもらつたり、逆に騙されたり、本当にいろんなことを経験できたり、本当にいろんなことを経験できたり、おかげで、人間としてかなり鍛えられました。オンラインではそういう経験ができないので、実際、社会に出て仕事をするとき大変だろうと思います。

ですから私たちは、二〇二一年にコロナで留学ができなくなったときは本当に困りました。私たちは留学試験を厳しくしているので、せつかく勝ち取つた留学に行けなくなつたとき、学生たちのモチ

ベーションがものすごく下がつてしまいました。そのときに、協定校と協力してオンライン授業で代替することも考えましたが、そういう方向はやめました。そんな小手先だけのことはしないで、気持ちを切り替えさせようとしたんです。留学はメリットばかりが強調されがちですが、実は大きなデメリットがあるんです。私立大学は留学している期間を在籍期間としてカウントして「一年留学四年卒業」を謳い文句にしているところが多いと思いますが、三年生の時に一年間留学



中川裕三[Nakagawa Yuzo].....

したら就職活動に出遅れてしまうし、三年生のゼミに出られないまま四年生で卒業論文を書かなければなりません。その点、もともと留学中は休学して五年で卒業するしかない国公立大学とは状況が違います。私たちは留学できなくなった学生に、留学できないことを嘆いていても時間をもつたいたないので、留学したらできないことを一生懸命やつて、留学はできるよになつたら行けばいいと、モチベーションを完全に切り替えさせました。

それから中国語が他の言語と違うのは、中国から日本に留学して、卒業後そのまま日本の企業に就職する優秀な留学生が大勢いる点です。彼らは母語の中国語だけでなく、日本語もかなり上手に使いこなします。中国語を専攻した学生たちは就職活動でそういう人たちと闘つていかなければならないのですが、留学経験のない学生の中国語では互角に闘うのは難しいんですね。ですからその学年に關しては、中国語を武器に就活しようと思わず、中国語は一つの教養として身につける程度にしておいて、留学しないか

からこそ日本でできることに専念するよう指導しました。例えば数年前に中国語ボランティアチームを新しい柱として立ち上げましたので、ボランティアの企画運営などを通して人間力を磨かせたんです。学生たちは中国語以外の武器を身につけることができたので、留学してなくても就活で大いに語ることがあって、結構いいところに就職が決まりました。

小川 大胆ですね。  
中川 私たちは事あるごとに教員間で議論し、そのつど学生にとってベストだと考えたことを着実に実行してきました。

## 語学教育と異文化理解

司会 今、そういう現地留学や現地体験ができるような条件が整ってきていると思いますが、第二外国語の学生に、そういうものをどんどん勧めるといえるのは難しいかもしれません。では、そういう学生に何を教えるべきなのか。中国語に必ずしも特化しなくてもいいのではという考えも出てきますね。先ほど清原先生も

その対応は一見大胆に見えるかもしれませんが、一つひとつの対応に非常に細やかな神経を使いました。

清原 専門で中国語を教えていらつしやる先生方は、学生の卒業後の進路に対する責任というのが非常に大きいことを改めて感じました。私のように第二外国語の中国語しか教えていないと、一年間教えてそれでさようならです。ですから、その学生が成長した姿を見るということがまずなのです。ですので、今の中川先生のご発言から、学生を育てる楽しさと同時に責任の重さを感じました。

おっしゃったけれど、例えば百人や二百人もいる教室で、中国語を教えるというのはなかなか難しい。文化を中心に講義形式で教えるという発想ですね。例えば第二外国語の中国語の授業で、現地の方を交えて問題解決型の取り組みをやっていくというのはなかなか難しいのかなと思います。

古川 そうですね。文化を中心に教えるということ、例えば「教文化？」という問いに対して「教文化」という答えがあっても不思議ではありません。でも、僕たちが中国語の教室で教える「文化」って何だろう？

昨日の講演でもフロアの聴衆から、いわゆる文化の教育をどう思うかと問われて、僕は「文化は教えなくてよい」と答えました。学生たちには餃子のこしらえかたや太極拳の技よりも、まずは中国語を身につけてほしい……と思っていいますから。特に中国から派遣されている先生方やボランティアの人々には、学生たちに中国語を教えてほしいのであって中華文化を教えてほしいわけではないと言いたかったのですが、本意がうまく伝わらなかつたかも知れません。

どんな言語であれ、そのことばと裏腹になつている言語文化は外国語を身につけることで見えてくるはずですよ。例えば、同じものを見ても母語と外国語では注目するところが違っていたり、同じことがらを語るにしても角度の違う語り方



をする。こんなふうに、言語を通して自文化と異文化の共通性や個性が透けて見えてくるといふ順番なのであって、その逆ではないはずですよ。

司会 それはよくわかります。

清原 そうですね。言語の裏には必ず文化があるので、ちよつとした動詞の使い分けからして言語によって世界の切り分け方が違うということがわかります。中国語だと服を着るも「穿」だし、靴を履くも「穿」です。日本語だと服は着ると靴は履くになります。学生に聞いてみるのです。日本語の着ると履くは一体どう使い分けていますか？ 中国語だと全部「穿」ですと。そこで日本語と中国語の違いから初めて自分の言語をふりかえることになります。そういうことが古川先生がおっしゃっているような言語の中に内在している文化ではないでしょうか。言語は物の捉え方そのものです。

また、観光ガイドブックを見てみるとわかるのですが、中国側が作った観光ガイドブックと、日本やアメリカどこでもいいですが、中国以外の国が作った中国

の観光ガイドブックは見ているところが違います。つまり中国側が見せたい部分と外国からやって来た人が見たい部分は、必ずしも一致しないのです。ですので、中国側が見せたい部分ばかりを見せられても困る、と古川先生は言いたかったのかなと思いました。

司会 たぶんそこが我々にとつても頭の痛い問題だと思えます。丸尾先生、その点いかがですか。

丸尾 私も昨日、古川先生のご講演を聞きました。その際に「語学の教員は文化を教えるべきではない」とおっしゃっていたので、結構ショックを受けたんです。というのは、私がいままさに授業中にそういう話をしているもので……。

第二外国語の場合、学生の学ぶ意欲に温度差が見られます。私の場合、せっかく中国語を選んできたのだから好きになってほしいと願っています。いかにして学習者のやる気を引き出すかということに常に考えています。中国語という言語に興味を持ってほしいという思いが強いです。授業では文法をメインに話

しますが、なかなか学生の集中力が続かない。そうしたこともあり、途中で余談を挟むことが少なくありません。例えば英語学、日本語学、言語学など専門的な内容にならない程度の話を交えつつ、中国語だとかいう考え方をするといった話題に加えて、中国の文化のことも話します。そうした背景がありましたので、古川先生のお話をうかがってちよつと動揺した次第です。その後、同様に感じたほかの参加者からもこの点について質問が出ていましたが、そのときの古川先生の回答から、ご発言の趣旨を理解して安心しました。

中川 私はいま専門課程の教員ですが、昔は第二外国語の中国語を教えていたことがあります。そのころ必ず最初の授業で学生に「何で中国語を勉強するのか」を質問することにしていました。ある程度学生の意向を考えながら授業をしようとしていたのですが、学生たちは異口同音に、「中国に旅行に行ったときに中国語が使えたらいい」と言うのです。いくつかの大学で教えていましたがどの大

学の学生も皆同じでした。先ほどの阿部先生のお話では、今の第二外国語の学生はコロナ禍で何のために中国語を学んでいるかもわからないというところらしいですね。そもそも旅行で使えたらいいというような弱いモチベーションでは、ましてや全くモチベーションもないのに中国語や他の言語を学ぼうとしても身が入るわけがないでしょう。

今、文化の話をされていましたが、中国には素晴らしい伝統文化があるので、そういうものは教え方によってはモチベーション強化になるかもしれません。が、そういう中国の伝統文化を正面から教えるのではなく、第二外国語では「異文化接触」について教えるべきだと考えています。今の日本は多文化社会化が想像以上に進んでいます。在留外国人が二八〇万人ぐらいいて、そのうち中国語を話すのは中国、台湾の人たちで、三割くらいを占めています。それはどういうことかと言うと、日本ではすでにいろいろな職場に中国語ネイティブの人たちがいるわけです。そういう人たちが日本での

暮らしにすぐ満足しているのかというところではなくて、日本社会に受け入れられなくて苦労している人が大勢いるので、中国語教育の現場でもそういう人たちに対応していく必要があるということ、二〇一九年に中国語教育学会第一七回全国大会を天理大学で開催したときにシンポジウム「中国語ニーズを再考する——行政・市民・学校の視点から」で取り上げました。その後、二〇二〇年に、二〇一九年のシンポジウムでご講演いただいた、近畿大学の高橋朋子先生に、本学の国際学部主催の行事でも在留外国人が抱える現状についてご講演（「誰も取り残さない社会をめざす——外国にルーツを持つ子どもの事例から考える」）いただき、私たち教員一同、在留外国人問題について認識を新たにただけではなく、天理大学国際学部がこれから目指すべき方向はこれだと確信しました。

在留外国人が抱える問題を解決するには、まずその人たちが日本文化のどういうところを受け入れられないかということについて理解しなければなりません。

日本には「郷に入つては郷に従え」という言葉があるように、日本人は日本に住んでいる外国人の人たちに対して自分たちの習慣を押しつけがちです。特に中国語は中国語ネイティブの第二外国語の教員がすごく増えています。個人のお話をうかがっただけでも、皆さん大変なご苦労をされているようです。それを場当たりの教室で教えてもらうのではなくて、中国語教育学会に日本にいる中国語を話す方々の経験を集約していただいで、第二外国語の授業でしっかり教える。中国語に限らず、他の言語でも異文化接触の問題はいくらでもあるはずなので、異文化を意識したことがない日本人と在留外国人の間に入って仲を取り持つことができるような、いわば多文化社会におけるリーダーを養成する場として第二外国語の枠組みを活用することはできないかと考えています。またこれから先、AIを活用した翻訳機がどんどん進化するなかで、大学の第二外国語が生き残れる道はそれしかないのではないのでしょうか。

天理大学は二〇二四年に大きな改組を予定していて、「多文化理解と言語」という新しい科目を作る予定です。本学の国際学部には一言語の専門課程があるので、中国語とか、韓国語とか、ロシア語とか、言語ごとに「多文化理解と言語」という科目を作って、言語よりもむしろその文化の人たちが日本で困っていることに重きを置いて教えます。その授業を学生たちに第二外国語に代えて、一つだけでなく可能な限りいくつでも履修できるようにして、多文化共生に対する意識を養います。天理大学の建学の精神の一つに「貢献性」というのがあるの

## 中国語教育の危機

司会 ありがとうございます。時間があまりなくなってきましたので、最初に申し上げたことに戻りますが、私はこれからの中国語教育に強い危機感を感じています。先ほどの第二外国語の問題もまさにそうだと思います。文科省や各大学も第二外国語は必要だと今は言っています

で、天理大学の対応として、多文化社会に貢献するための枠組みを作って、学生に自分たちが多文化社会のリーダーになるんだということを意識させていこうと考えています。

教育学会のシンポジウムでは多文化社会における中国語教育のあり方を検討する必要性を提起しましたが、その後あまり議論されていないようです。言語をどう教えるのかということも大事ですが、教育学会のほうで第二外国語の新たな役割として本格的に検討していただきたいと、この機会に改めてお願いしたいと思います。

が、そのうちにやはり専門で十分じゃないか、語学のプロを養成すべきだといったような議論になってくると思うんですよ。そうすると、いま非常勤の先生が担当しているような授業が大幅にカットされてしまうかもしれない。そのときに、そうじゃないんだということを我々のほ

うから強く言えるようになっておく、あるいはそういった体制を作っておく必要があると思います。中川先生のところはそれを始めておられるわけですよ。そういった議論を我々も学会などで始める必要があると思います。また、ICT活用が声高に叫ばれるなか、それらを使った教材を開発して、人件費の削減を行おうとする動きも出てきています。これに関連して、阿部先生、何かあればお話しいただけますか。

阿部 近畿大学では、二〇二一年度から大学独自のオンデマンド授業（KICS オンデマンド）を開始しました。現在は、教養科目のみで語学科目はまだ開講されていませんが、おそらくいずれ英語、第二外国語でもやっていくことになると思います。今年度、教養科目「国際化と異文化理解」という授業を、独仏中韓四名の第二外国語専任教員がオムニバス形式で開講し、私はそのなかの中国文化を担当しました。

KICS オンデマンドは、大学内の撮影スタジオで講義を撮影し、全学部の学

生が受講可能で、多様な学習機会を与えるのが狙いの一つです。現在、クラスの上限を百名までとしています。詳細は割愛しますが、このKICSオンデマンド授業自体は、他大学のオンデマンド授業と大きな違いはないのですが、私がこの場でお話ししたいのは、授業運営方法です。簡単に言いますと、「講義動画撮影者と授業担当者は別の教員でもよい」という点です。例えば、A教員が一五回分の講義動画を撮影し、授業担当者は別のB教員が担当するとします。学生はA教員の動画を視聴します。では、B教員は何をするのか。B教員は、まずA教員の講義動画をすべて確認し、その動画の内容で課題やレポートを作成し、それを添削、解説し、成績をつけます。A教員自身は録画だけで授業はしません。実際、「国際化と異文化理解」も、独仏中韓の四名でオムニバスで講義動画を撮影しましたが、実際に授業を担当しているのは、仏、中の二名です。よって、仏、中の教員は、独、韓の授業の課題も考えます。これを中国語の授業に置き換えたら



阿部慎太郎[Abe Shintaro] ·····

……いくらなんでもあり得ない、とおっしゃる方もおられると思います。もちろん、この運営方法には改善の余地があります。本学のKICSオンデマンドは実施してまだ二年目で学校側もまだ試行段階ではあり、我々教員側も大学に意見しています。しかし、今後こうした流れにならないとは言いつれない部分もあるのではないのでしょうか。実際、我々は二〇二〇年一月頃からわずか二、三ヶ月足らずで、経験したことがない講義動画やオンラインテストを作成し、実際にあり

得ないと思っていたオンデマンド授業をやりました。大学や国からしたら、オンデマンド授業はできた、という認識です。今後、授業形態や労働環境は大きく変わっていくかもしれません。こうした情報は、中国語教員全体で共有し、それにどう対応するか考えることが重要だと考えています。

**司会** 実はその講演を先日お聞きして、本当にいろいろなことを考えさせられました。第二外国語の問題もそうですし、我々専門でも同じことです。第二外国語だったら、誰か専任の先生が授業を録画し、それをオンデマンドで学生に見せ、ほかの先生は宿題の添削とかさえばいいので、人員削減につながりかねないなと思ったのです。先ほど清原先生も非常勤をどうするか大変だというお話でしたが、例えば非常勤の先生はオンデマンドで出された課題の対応さえすればいいので、学生二〇人とか二五人とかの少数でやる必要もなく、百人でも、二百人でもやれるだろうとなりかねない。先ほど中川先生がおっしゃったことはとても重

要で、これをやるには非常勤も含めた人員確保が必要だということを、我々の方から声を上げ、さらには行動していかないといけない。我々も国や大学から求められればNOとは言いつらいし、非常勤

の先生はなおさらでしょう。そうなるからでは遅いので、中国語教育というのはこういうものですよということを示していく、大学では何を教えればいいのかを真剣に議論していく、そういったことを今からやっておかないと、コロナパンデミックの先に語学教育において大きな変化が待ち受けているかもしれませんね。

**阿部** 同感です。我々教員は、改めて「対面でしかできないことは何か」、逆に「対面じゃなくてもできること（オンデマンド、オンライン、ICT教材でもできること）は何か」を考えないといけません。清原先生がおっしゃったタスク活動などはオンデマンドでは難しいです。逆に、対面じゃなくてもできることは何か、このコロナ禍で色々考えました。その一つに文法の解説はどうでしょうか。ある教員が撮った文法解説の動画コンテ

ントを、他の教員の授業でも活用する。学生は事前に動画を視聴して予習し、対面授業では担当教員がその動画の補足説明をし、タスク活動を中心に行う。

本学の一年次クラスは、専任、非常勤合わせて五〇名近くの教員が担当し、共通シラバス、共通教科書を使用しています。そこで、文法解説動画を一人の専任教員が撮影し、共有することで各教員のコンテンツ作成の負担軽減にもなりますし、対面授業では何か別の活動に時間を充てることができなかと。実際に、二〇二一年度、本学では専任教員が教科書一冊分の文法解説動画を撮影し、それを非常勤講師の先生方にもお使いいただいたところ、「すごく助かった、この解説動画を補足説明しながら活用している」という声も聞きました。しかし、一方で何人かの先生からは、「一人の授業動画を见せるなんて、他の先生の授業に口出しするようなものだ」、「じゃあ、その先生たちは授業をしないということか」という声もありました。このとき、授業は全部自分一人でやるものだという考えの方

もおられ、今後こうした動画コンテンツの活用に対しての考え方、授業方法という点も、議論していく必要があるのではないかと思いました。

**司会** 結局対面でないことやれないこと、例えばPBL型やCOIL型の授業をやるとか、要するにオンデマンド型ではないかたちのものを授業の中に取り込んで授業展開していかなければならない。先ほど清原先生がおっしゃったように大きな指導要領ですよ。そういうものがあれば多くの先生が活用できるし、それぞれの個性も発揮できるんじゃないかと思えます。教員の教える余地を残した、指針みたいなものがほしいですよ。

**清原** すみません。阿部先生が人の授業に口を出してはいけないと言われた話ですが、それはたぶん授業すること＝説明すること、知識を注入することという感覚で授業を捉えていらつしやるのではないかと思えます。

**阿部** はい、特に今回提案した動画が文法の部分だったからだと思います。  
**清原** 人の文法説明に口を出してはいけ

ないという考え方はとても強いので難しいです。それにもう一つ現実的な問題として、例えば古川先生や丸尾先生が収録された文法講座のビデオなど典型的な教材があつてそれを使つてくださいますと、タスク型授業の経験があまりないと、授業で何をしたらいいかわからなくなるかもしれません。文法説明は不要、説明はビデオを見るとなると授業では何をすればいいのだ、と困惑しているところに、いきなり反転授業をしてくださいと言われると困ってしまうのではないのでしょうか。

**司会** ただ、先日の阿部先生のお話がかががついて、例えば日本人の間違いや、具体的な例などを挙げて話すことは可能ですよ。

**阿部** はい、そういう部分は学生一人ひとりと異なりますので、それに合わせて補足するのは担当教員にしかできません。

**清原** 日本が多言語社会になつていくなかで、その中で共生していくための中国語学習があります。随分前の話ですが、第二外国語が必修なので仕方なく中国語

を選択した学生だと思えますが、僕は一生涯中国に行くつもりはないし、なんでこんなことをやるんですか」と啖呵を切った人がいたのです。当時も今もそうですが、中国の大学に留学したり、中国に旅行に行くという設定が教科書に見られます。もちろんそれともかまいません。ただもう一つ、日本で使う中国語というのを考えていいと思います。

例えば、学生がアルバイトをしていたら同僚が中国語圏からの留学生だったとか、あるいは就職したら同僚だけではない、社長が中国語圏の人だということが現実になつていきます。例えばシャープのトップは台湾から来ています。そこで、日本で使う中国語、多言語化していくなかで共生していくための一つの手段としての中国語です。なぜ中国語なのだと問われたら、もちろんベトナム語も必要だしビルマ語も必要だけれども、今のところ一番多いのは中国語圏出身の人です。限られた時間ですべての言語をやるわけにはいきません。例えば、隣に住んでいる中国語圏出身の人があまり日本語

が得意ではなくて、子供の通う小学校からお知らせが来たけれども何を書いてあるのかよくわからないと言われたとき、片言でもいいから中国語で説明してあげるとか、あるいはよく問題になるゴミ捨てルール、何曜日は何ゴミの日ですと中国語で説明するとか、そういう教材があつてもいいと思います。明治学院大学の西香織先生は実際にNHKのラジオ講座でそういう教材を作られています。例えば、電車に乗っていたら地震の警報が鳴ることがあります。いきなり皆の携帯電話が一斉に鳴り始めるので、事情を知らない外国から来た人にとってはさぞかし怖ろしいことでしょう。そのときに中国語圏の人に中国語で説明する。そういう視点での教材というのがあれば、先ほど中川先生がおっしゃつた多言語社会になつていく日本の中の共生のための中国語、昨日の植村先生の講演にあった仲介者としての中国語を学ぶことができま

す。完璧な中国語でなくていい。日本に定住している人だったら程度の差はあれ日本語ができるでしょうから、伝わるの





だったら日本語と中国語を混ぜて話してもかまわないと思います。

**司会** 先ほど中川先生が学会に提案したとおっしゃいましたが、我々としては、教科書や授業内容はもちろん重要ですが、今後、多文化共生と協働がより強く求められるであろう日本において、専門であるか第二外国語であるかを問わず中国語教育はこんなに社会に貢献していますよと、その可能性とともにもっと発信していく必要があると思います。そのために、学会などでの中国語教育の今後の在り方についての活発な議論が必要となっていると思います。

**清原** 特に国境を接する言語の学習は大切です。国境を接していると歴史を振り返れば紛争が必ずありますから。

**司会** それを言ったら、それは専門で教えなさいとなりませんか。

**清原** 専門で教えなさいというよりは、やはり理解は広く必要です。こういう言語を話す人たちと一緒に隣合わせで地球に住んでいるのだということ、専門で学ぶ一部の人しか知らなくていいので

でしょうか。そうなると第二外国語全体として考えた時に、フランス語やドイツ語のような国境を接しない言語をどう位置づけるかという問題が出てくるので、持ち出すといささか危ない話題ではあります。

**司会** 語学教育にはそういう意味があるということですね。それも確かに社会貢献の一つになりますね。

**丸尾** 第二外国語は、今後なくなるんじゃないかという危機感を持つています。外国語のコマ数が減らされる理由というのが、名古屋大学の場合は、理系の専門科目の細分化が進んでいて、そのためのコマの確保が必要になったという事情もあるようです。今後、そうした動向に対処する際に、こちらとしては外国語を学ぶと世界が広がるといった主張を展開することが想定されます。ただし、このような主張はあまりにも当たり前すぎで、今さらインパクトがないと考えてしまうのですが、全学ではこうした認識が必ずしも共有されていないとも聞きました。中国語を第二外国語で学んだ学生の

アンケートを見ると、最初は必修科目としてやらされている気持ちが強かったものの、実際に学んでみて良かったという回答も少なくありません。そういう意味では、今後必修科目として残してほしいと思います。

**司会** ありがとうございます。まだお話は尽きませんが、予定の時間となりましたので、このあたりで今日の座談会はお開きとさせていただきます。本日は、各大学の状況は異なるなかで、それぞれのお立場から中国語教育の現状と今後の課題について色々とお指摘いただき、中国語教育が抱える問題がかなり明確になったのではないのでしょうか。今回の座談会が、中国語教育に携わる方々や、中国語、中国語教育に関心のある皆さんが、これからの中国語教育はどうあるべきか、どうしていかなければいけないかを考える一助となることを願ってやみません。

先生方、本日は誠にありがとうございます。ありがとうございました。

(二〇二二年七月三十一日 愛知大学)